

英文法の説明に対する新しいアプローチ (1)

平見 勇雄

A new approach to how to learn English grammar (1)

Isao HIRAMI

Abstract

This paper is about how to learn English grammar in a new way. There are many students who are not good at English in my classes. So I would like to think about how to teach English learned in junior high school and high school in a different approach, which is based on the fundamental English characteristics.

Key words : abbreviation, rephrase, explanation of words

キーワード : 省略, 言い換え, 語句の説明

はじめに

大学で英語を教えて四半世紀を越えた。その間一年生に対しては毎年のように高校までの復習を兼ねて基礎的な英語を確認しながら授業を行ってきたが、復習と言っても中学、高校と全く同じ教え方をしたのでは意味がない。もしかしたらそれでは同じように理解ができない可能性もある。別のやり方で学生に英語を教える方法がないだろうかと思ったのがこの論文を書くことにした動機である。もちろん高校の時より難しい説明を行ったのでは理解に結びつかない。ますます英語が嫌いになって逆効果である。したがって一つの単純な約束事を軸に全体が見えるようなやり方がないだ

ろうかと思った。また大学での講義であるから、そこには中学、高校とは違うプラスアルファを授業に盛り込む必要がある。

文法的なことに終始するような授業はしないし、読解や聴き取りにもそれなりの時間を割いて授業を進めているが、今回は同じ中学、高校で習った内容でも少し違った点から英語を学生に考えてもらいたいことから現在実践している授業の一部を以下に述べたい。

とは言っても、先生方から見れば以下の内容はごく普通の授業と言われそう。確かにその通りだが、これまで教えてきた経験ではほぼ毎年共通する学生の弱点を指摘し、そこから英語を改めてとらえたいとの思いがあるので、私が行っている内容を概観したい。

1 学生がほとんど答えられない基礎的な内容

英語には日本語に見られない特徴があることは英語教育にかかわっていない人でもご存じのはずである。単数複数の区別、数えられる名詞、数えられない名詞など、頭を悩ませた経験は誰にでもある。中学、高校の英語の授業など覚えていないという英語に興味のない人でも何となくわかっている人は多いだろう。なので以下述べることは英語教育に関わっている人達にとっては当たり前のことで目新しいことは何もない。

しかし学生に聞いてもほとんど知らない事柄が存在することから、ある側面から見ると大きな視点から英語を見ることをしてこなかった、あるいはそういった癖を学生は身につけていないのではないかとと思われる。もしかしたら中学や高校では文法の教科書や参考書に、それぞれ使用している本が違って同じような学習内容が並んでいて、その單元ごとの理解だけに終始してきたからではないか。

その一つが日本語と違って、英語では前に出てきたことやものを二度目に語る場合、別の語を使うという約束事である。我々英語教員にとってはごく当たり前のことだが、学生にしっかりとそのことを叩き込んでおけば答えられるはずなのに答えられる学生がほとんどいない。それを如実に語るのが代動詞である。

代名詞という言葉は、英語の授業ではよく使われる表現なので、英語の不得手な学生でもさすがに聞いたことがあり知っている。Lucy is my friend.という文があつて次にLucyを語る場合はsheという語を使う。この程度なら英語に苦手意識の強い学生でもわかっている。

しかし代動詞となるとそうではない。ほとんど初めてその語を聞くという顔をしている学生が非常に多いことに驚くくらいである。たとえば次のような中学一年で習うレベルの文を黒板に書き、Yesで始まる文のdoの品詞を問われれば答えられる生徒はいなかった。

Do you like apples?

Yes, I do.

No, I don't.

最初の文頭のdoは助動詞であるが、これも答えられる学生は決して多くない。とにかく不得手な学生というのは文法用語を知らない。その重要性をおそらく認識していないのだと思う。それでも助動詞という言葉は知っている。canやwill, mustのような語で習うし、参考書や教科書の目次に出てくるからだ。ただdoとなると、教えられてはいてもあまりにwillを始めとする他の助動詞のイメージが強いので戸惑ってしまうのではないかと思う。doには助動詞の他に動詞があることも関係しているかもしれない。

それでも代動詞と比較すればその比ではない。次のYesの文のdoがlike applesを受けた代動詞であると答えられないのである。しかも否定であるNoの後ろのdon'tがYesのdoと対応しているというとらえ方をしている学生も多い。原因は何だろうか。

それは英語の基礎的な約束事を中学、高校で教えられていないか、あるいは教えられていてもせいぜい代名詞程度で止まってしまっていて、応用がきかないせいだと思われる。しかしこれでは本当に英語の特徴を理解しているとは言い難い。中学、高校の先生方はもちろん授業で説明はするのだろうが、この特徴が英語に幅広く浸透しているという事実を学生は受け止めていない。

よく出てくる例文に次のような問題がある。

I lost my umbrella yesterday. But I found it this morning.

I lost my umbrella yesterday. So I must buy a new one.

上の文では傘が同一のものなので二度目に指す場合は指示代名詞のitを使うが、下の文は傘であることは同じだが同一の傘ではない。そのためitではなくoneが使われると説明されるが、ここにも同じ原理が浸透している。いずれも最初に出てきた言葉を二度目に指す場合、同じ語を使わない。同一のものを指す場合、

概念上同じものを指す場合と、区別はあっても、別の言葉で表現するという約束事は（これはthe same ~ that, the same ~ asでも同じ原理である）変わらないのである。その同じ原理という点から英語をとらえるともっと英語という言語の特徴がみえてくると思う。

2 言い換えと省略

上で挙げた最初の英文は中学一年で習うレベルであるが、英語のごく基本的な文の中に重要な英語の特徴がはっきりと見受けられる。それが先ほど述べた代名詞、代動詞に代表される言い換えである。今では小学校から英語の授業が導入されているが、私が中学に入って英語を習いたての頃でも日本語と英語の特徴の違いは教えられた覚えがある。たとえば英語にはbrotherという語はあっても兄とか弟という概念を一言で表す表現はないとか、waterは水であるが湯となるとhot waterとなり、日本語と英語の単語で対応させると浮き彫りになる例から個々に説明されることはあった。少し学年が進むと概念自体のない言葉もあると教えられる（よく引き合いに出されるのが「わび」とか「さび」である）。

しかし英語が不得意になるかどうかは、個々の単語の知識ではなく、圧倒的にごく基本的な文法的知識、あるいは基本的な約束事の習得にあると思われる。それが英語を理解できるかどうかにかんして決定的に影響しているのではないかと思う。その一つが先ほどから挙げている二度目に出てくる語の言い換えである。

英語に対応する日本語訳との関係から、二度目に言い換えとして出た代名詞のheやsheを日本人はいつも「彼」とか「彼女」と訳してしまうが、ほとんどがもともとの日本語に対応していない。翻訳の影響で日本語にもこれらの言葉は浸透しているが、それでもそのまま訳してしまうとおかしいと思うこともしょっちゅうある。英語と違い、日本語は何度でも同じ言葉が使われるからである。特に母親とか父親の場合、英語は

heやsheで受けるのが普通でも、日本語でそれをそのまま彼女、彼と使うことはない。もし使ったら特別なニュアンスが生じてしまう。父親や母親を「彼」「彼女」と呼ぶと、親と距離を置いた関係であると私などは感じてしまう。

日本では会話で固有名詞を言えば最後まで固有名詞で通すのが当たり前で、たとえば古市さんという人と話していて、その人を名字で常に呼んでいるなら、我々日本人は最後まで古市さんと呼ぶ。同じ言葉を使うことに何ら不自然さやおかしさを感じない。

一方、英語では二度目以降heやsheに代わるだけでなく、my dearとかdarlingとか、いろいろな語を使って同じ人を指し示すことは海外の映画や本でしょっちゅう出合う。私は二年生の授業の一つに、映画を使ってスクリプトを解説しながら授業を行っているものがあるが、その授業では典型的な日本語と英語の違いを学生に理解させることができる。それくらい豊富に例が出てくるからである。

しかし単なる名詞だけの範囲であれば、実際の会話や教科書で使われる言い換えができないからといって英語が不得意になることはない。決していい日本語ではないし違和感はあるとしても、意味は通じるし、逆に英語でしゃべる際、日本語と同じく言い換えをしなくとも、いい英語ではないが意味は相手に通じる。だからコミュニケーションという側面だけから見れば、間違っただけでも大した問題にはならない。

しかしコミュニケーションの点ではなく、英語を理解するという点から見ると、言い換えはとても大切な約束事で、この基本がわかっているかどうかは他の文法項目を理解できるかどうかにかんしてまで関わるのである。関係代名詞を題材に言い換えを見てみたい。

3 言葉の意味を理解する大切さ

言い換えの観点から関係代名詞を見る前に、私が授業で学生に説明する際に大切だと思っていることを述

べておきたい。これはあくまで英語が不得意な学生への説明である。

私自身の学生時代を思い出してみようと思うのだが、たとえば改めて関係代名詞という日本語そのものの意味を学生時代に考えてみたことがあるかと聞かれれば否である。なぜそう呼ばれているのかということなど学生時代は考えたりしなかった。そう呼ばれているからそうなのだという程度の認識しかなかった。しかしこれは教える側になって初めて大切なことだと感じるようになった。英語の授業をやって学生の理解度が格段にあがると実感するのが、文法用語そのものの説明をしたあとで、その項目を説明したときの学生の反応である。たとえば代名詞という品詞だが、代名詞を私は「前に出てくる名詞の代わりに使われる詞（ことば）」と説明する。Tomという語を二度目に言う場合はheだが、まさにTomという固有名詞の代わりに使われる詞である。だから代動詞のdoを説明する場合もそのようにやればよいし、これはどんな場合にも同じように応用できる。

言葉そのものの意味をしっかりと理解させることは英語が不得手な学生にとっては非常に有益である。私が学生に行う説明が本当かどうかは実は私もわからないのだが、たとえば不定詞という項目を教えるとき、私は不定詞という言葉自体の意味を説明する。不定詞には名詞的用法、形容詞的用法、副詞的用法というのがあるが、不定という語を考えると文字通り「定まっていない」ということである。つまりある時には名詞となり、ある時には形容詞になり、そしてある時は副詞になると説明する。何々の用法などというから学生は三つを覚えなさいといけなさいと思ってしまう。できない学生ほど名詞的用法といっても意味がわかっていない。

もちろんその根底には英語の基礎として文型を学生に把握させることは重要だ。だから主語には絶対に名詞しか来ないと教える必要がある。そこに来れるのは名詞か、それに代わるものしか来ない。あるいはそこに置いてしまうと名詞に代わるものとしてしか我々は

とらえられないと説明する必要がある。

現在完了形も同様だ。おそらく私のような教え方をすると疑問をもつ教員もいるかもしれないが、事実がどうかはともかく、出来るだけわかりやすいやり方で言葉をマスターさせるというのは非常に大切なことで、日本語教育の現場でもそのような教え方が行われる場合がある。実際には国語学と日本語を実践で教える場合とでは教える内容が違う項目がある。理論的には嘘になってしまうが、ほんの少しの例外のためにわかりやすい理解のあり方を否定してしまえば、難し過ぎて外国人に日本語を習得させる妨げになる。そんなことからいくつかの例外を承知の上で、日本語の、たとえば「は」と「が」の違いを教えたりするようだ。

現在完了形というのは私が学生だった頃は中学三年生の最初の授業で出てきた文法事項だった。日本語は英語のような時制のとりえかたをしないため、現在完了には完了、経験、継続、結果の4つの用法があると覚えたものだ。しかし覚えてもちっとも理解にはつながらない。そこで私は学生に「過去にあったことを現在形のhaveを使って表しているのだから、過去との繋がりを現在も持っているということなのだ」と教える。実際はhaveの後ろに来るのは過去形ではなく過去分詞形であるが、そういうことは極力伏せて説明をする。実際に現在完了形が担う役割はその通りだからだ。過去と現在の繋がりは実際に4つしかない。過去からずっと現在まで「継続」していること、過去から現在まで「経験」したこと、過去から現在までやった「結果」、そして過去からあることが今「完了」した、の4つである。そしてこれをさらに図を使って説明すると学生は覚えやすいし非常にわかりやすいと言ってくれる。

自分流に言葉を解釈することは、実際の言葉の成り立ちとは違うかもしれないが、それで文法の理解が進み、正しい使い方ができるようになるのであれば、そのメリットとデメリットを比較すればどちらがよいかわかるはずである。日本語教育のように、必ずしも国語学で教えられていることと同じである必要はない。

4 関係代名詞

それは関係代名詞でも同じである。たとえば次のような文を考えてみる。

I know the man who is standing there.

この文はI know the man.とThe man (He) is standing there.の二つの文から成っている。この二つの文を一つにする場合、同じ共通項（関係代名詞というくらいだから共通項は名詞でないといけない）をつないで一つにするわけだから、共通する語はthe manとheということになる。人称代名詞という表現は人という言葉が使われていることからわかるように、人であって（三人称はそうでない場合もあるが）、前に出てくる名詞の代わりに使われる詞である。したがってheはまさにそうであるわけだが、前に出てくる詞を指しているというだけで、代名詞という言葉はそれ以上のことを語っているわけではない。しかし関係代名詞の「関係」という言葉から想像できるように、この場合の関係は別々の文を関係づけるということである。つまり二つの文を結びつけて一つにするという役割を果たす。

その点からこの文を見るとthe manという語がある場合、英語の約束事として二度目には別の詞で表現しなければならない。英語ではその場合、二つの選択肢がある。その代名詞が別々の文のまま、前に出てきた内容を受けるとか、一つの文にして述べるかである。その点で関係代名詞は文字通り、二つの文を関係づけて一つにすると同時に、前に出てきた名詞の代わりをしている詞である。したがってwhoを使うことで、heやsheが人を指すのと同じ情報を引き継ぐと同時に、二つの文を繋ぐという役割も果たす。Whichならこれは人ではないという情報と同時に、二つの文を繋ぐ働きを持つ。単に二度目に出ている内容だという情報だけでなく、代名詞が持つのとほぼ同様の情報を伝えるのである。

ただしこれが男性か女性か、単数か複数かという情報は消える。もし人称代名詞と同様の情報まで受け継

ぐように発展すれば、その使い分けが複雑になってしまう。そうなると言葉の経済性の面で大きな負担が生まれてしまう。他の言語の中には男性女性名詞が存在し、それに合わせて形容詞等も変化しなければならないものがあるが、そうなる外国語として初めてその言語を習う人には非常に大きな負担が生じる。情報は切り捨てながらも最低限伝える効率性の良さが英語にはあるように思う。

このように代名詞、代動詞、関係代名詞を説明していくと、それぞれの文法的な項目ごとに習ってきて一つ一つは関係していないように見えて、実際は背後では一つの約束事でしっかりつながった特徴のあることがわかる。つまりそれぞれが前にある情報を受けている役割を果たしているという共通の特徴である。日本語には関係代名詞がないと言われるが（訳語としてよく（というところの）というのを使うと聞くが）、それは日本語に前に出てきたものを受けるという特徴がそもそもないからだろう。それは代名詞や代動詞も同様である。先ほど挙げた固有名詞の例(古市さんの例)と同様だ。ある言葉が独自の特徴を全体に浸透させて成り立っていることは「[する]と[なる]の言語学」(池上嘉彦1981)という著書で指摘されているが（既に証明されていると言ってよい）、まさにその特徴がこの場合、英語という言語に見られるのである。

5 省略というもう一つの大切な英語の特徴

最初に挙げたDo you like apples?の文に対する答えが、肯定ではなくNo, I don't.という否定の場合は後ろにlike applesが省略されている。これは否定のdon'tを言えば、後ろに何が来るかがわかるからである。だからわざわざ言う必要はない。言葉の経済性から考えても当然である。

省略はどんな言語にも見られる。日本語でも英語でも語はなるべく短く言う。単語レベルなら、就職活動を就活というのもその一つだ。省略がどの程度習慣化

するかは言語によって地域によってもおそらく異なっているだろうが、常識的に考えて、普段よく使われる語で、長い語ほど短い表現となる。そしてそれらが両方同時に存在するものもあれば、長い語がほぼ使われなくなって消えてしまい、実際は何の略なのかが分からない場合もある（我々が日常使っている「経済」という語が「経世済民」の略語であることを知らない人も多いだろう）。英語の頭文字を取って言う場合はもちろんだが（たとえばTPPなどはここ数年よく使われる語であるが、実際には何の語の略かを知らない人も多い）、実際には語だけでなく、文にも省略は当然反映される。その典型的な例が分詞だろう。

まずは分詞構文を見てみる。よく学校で出てくる分詞構文の問題の一つは次のようなものだ。

Because he is honest, he is trusted by everybody.

Being honest, he is trusted by everybody.

主文（この場合、両文とも後ろの文）の主語と従属節の主語は同じなので、わざわざ従属節の中で繰り返し言う必要はない。また時制が同じなので特にそれに対して断る必要がない。あとは前後の文の兼ね合いでどのような関係にあるかがわかるので両者を結びつける接続詞も必要としない。

分詞は現在分詞と過去分詞に分かれるが、これも基本は省略という点から説明できる。すべての例がそうというわけではないが、基本的に関係代名詞とbe動詞の省略をするためである。

The boiling waterはthe water which was boilingのことであるし、the man standing by the doorはthe man who is standing by the doorのことである。

参考文献

池上嘉彦 1981 『「する」と「なる」の言語学』大修館。

——— 1991 『英文法を考える』筑摩書房。

平見勇雄 2006 英語所有構文に見られる英語全体に浸透している言語傾向との接点に関する考察 吉備国際大学社会福祉学部研究紀要11. 129-141.

Be動詞が現在形になるか過去形になるか、あるいはthe fallen treeのように完了形からのものである（the tree which has fallen）かは、名詞と分詞との意味関係から必然的に決まる。それは分詞構文のときに接続詞が何になるかが文と文の関係から決まってしまうのと何ら変わらない。

このように中学一年で当たり前のように習う英語のごく基本的な約束事（ここでは言い換えと省略）を使って、その後学習する文法の多くに、この約束事からいくつもの現象を説明することができる。しかもこの方法は英語という言語の特徴を学生により理解させられるのではないかと思われる。

単元ごとに習うさまざまな種類の文法も、実は一つの簡単な約束事が常に絡んでいて、その点から文法を学び直すのは意義があることではないかと思う。

まとめ

英語の授業では以上のように、言葉自体の説明とごく基本的な英語の特徴からいくつもの実際の文法を説明している。言葉の経済性も紹介しながら、言い換えと省略、この二つから英語のいくつかの文法的な面をとらえ直し、学生の理解につなげることができるのではないかと思う。他にも日本語とは違う英語の特徴がある。その一つは文型である。文型という、やはり日本語にはない、英語独特の形式の面からいくつかの共通項が見出せる。そういった別の観点からの英語の再学習は日本語と英語の違いを浮き彫りにしながらの新しい理解の仕方を提供していけるとと思われる。